

---

## 巻 頭 言

副学長（評価・IR担当）

評価・IRセンター長 上 田 晴 彦

---

皆様におかれましては、日頃から評価・IRセンターの活動に多大なご支援並びにご理解を頂いておりますことを、感謝申し上げます。お陰様で、ここに令和元年度の秋田大学評価・IRセンター「活動報告」を発行することができました。評価・IRセンター長として、厚く御礼申し上げます。

令和元年度における評価・IRセンターの評価業務に対する主な活動は、以下の通りです。評価関係では、例年おこなっている法人評価関連の業務を滞りなくおこないました。また令和2年度に受審予定の認証評価に対応するため、大学改革支援・学位授与機構に対して事前の個別相談をおこなうなど、順次対応を進めています。さらに同じく令和2年度に実施される第3期中期目標の中間評価に対しても、準備を進めています。

次にIR関係では、以下のことをおこないました。まず平成30年度に新たな教員活動評価制度を導入しましたが、評価内容をブラッシュアップすることで不具合を無くし、より透明性や公平感のある評価制度となるよう改善しました。また新たな大学情報データベースの構築に向けた取り組みをおこない、先に述べた教員活動評価制度を組み入れた新システムを、現在構築しています。

以上が本年度の評価・IRセンターの主な活動状況ですが、息子が大学生となったためでしょうか、日々の評価・IR業務をおこなうなかで、最近は自分の学生時代について思いを巡らすことが多くなりました。私が国立大学の学生だった頃はのんびりしており、授業は通年制だった上にシラバス等もなく、休講も多かったと記憶しております。しかし私が大学教員となった時には、多くの大学で Semester 制が採用されており、さらに近年はクォーター制の授業もおこなわれるようになりました。こうなるととてもあわただしく、綿密に授業計画を立てておかないと（つまりきちんとしたシラバスを事前に作っておかないと）、教授すべき内容を伝えきれず、中途半端な授業になってしまいかねません。さらに大学教員は学生からの授業評価も受けねばならず、大学での学びの様子は根底から変わってしまったとつくづく思います。

このような大学の変化は、授業風景だけではありません。皆様もよくご存じのように、独立法人化前のかつての国立大学の時代における運営交付金は、毎年ほぼ決まった額が各大学に配分されておりました。しかし2004年度に国立大学が法人化される少し前から競争政策を国が導入することによって、この仕組みは大きく変更されることになってしまいました。現在では「国立大学法人評価に基づく配分」および「重点支援評価に基づく配分」の2つからなる評価に基づく配分がおこなわれており、国立大学法人は本格的な大競争時代に入ったといってもよいと思います。

残念ながら評価に基づく配分がおこなわれてまだ日が浅いため、評価指標が毎年のように変わり、各国立大学法人は右往左往している状態が続いています。このような動きを評価・IRセンター長として眺めていると、評価というのは本当に難しいということを感じさせられます。評価・IRセンターは秋田大学の今後についても大いなる危機感を持って、このような時代に必要不可欠となる評価・IR活動を進めていくつもりでおります。これまで以上のご支援とご協力を、心からお願い申し上げます。